展観によせて

中国の青磁について —小山冨士夫著『支那青磁史稿』より—

悠久二千年の歴史をもつ中国の青磁は、幽玄深邃なその釉色で世界を魅了してきた。空のように澄んだ、空のように深い中国の青磁は、又空のように一刻も同じ時がなく、二千年間その釉色・器形・作風を変転しつづけている。漢に始まり今猶その余脈を伝えている中国の青磁がどんな発達変遷をとげたか、今日我々の知り、我々の発見している資料は悠遠な中国の青磁の全貌を窺うにはまだ不十分である。

漢六朝の青磁は器形・作風も茫洋とし、釉調にも蒼古な趣きがあり、どことなく草昧期の渾然とした大きさと濁りがある。唐から五代・北宋初期にかけての青磁は、器形も整い、文様も流麗精緻となり、華やかな時代の雰囲気が感ぜられるが、まだどこか古風なゆったりしたところがある。中国歴代の青磁で形の最も正しく厳しい、文様のきわだって鮮やかなのは北宋後期の汝窯であろう。緊密鋭勁なその作風には厳粛な時代の精神がよく表われ、馥郁たる芸術的な香気の実に高いものである。然し青磁の美しさは何といってもその釉色にある。青く澄んだその釉色には宝玉のような輝きがあり、冬の空のようにふかぶかとした青磁の色には底知れず深い東洋の神秘がたたえられている。中国の青磁の名を世界に高からしめたのは形でも文様でもなく美しいその釉薬であろうが、青磁焼造の技術の最高度の発達をとげたのは南宋時代で、南宋の青磁は官窯にしても、龍泉窯にしても、吉州窯にしても、特に美しい釉色をしている。殊に南宋官窯は碧玉を見るような実に美しい色をしており、恐らく陶磁器でこれほど深い魅力をもった釉薬は他にあるまい。中国人の好む「深く蔵して空しきが如し」とか、「渾としてそれ濁れるが如し」といった言葉が最もよくこれを形容しているようである。南宋の龍泉、即ち我国でいう砧青磁は官窯ほど深い含蓄はないが、然し爽朗なその釉薬は官窯におとらず美しく、粉青色のその釉色は古来青磁の代表的な色調とされている。南宋の官窯や龍泉が特に美しいのは釉薬に含有されている鉄分が純化されているためで、その前後の青磁、例えば北宋の汝窯にしても、唐・五代の越州窯にしても、遡って漢・六朝の青磁にしても、或いは降って元・明の龍泉にしても、すべてオリーブ色がかって濁った黄味を帯びているのは、含有する鉄分が不純で、くだけて云えば釉薬に土気がまざっているためである。

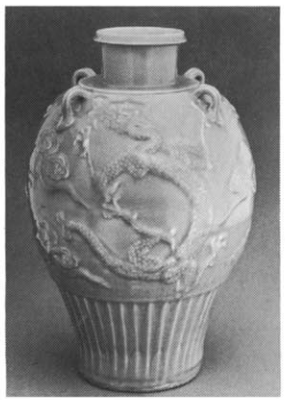
元以降中国の青磁は器形・文様・器地・釉薬ともに著しく低下し、明中期以降は更にこの趨勢が甚だしいが、これは中国の民族文化の興亡と照し合わせて頗る興味ある問題のようである。中国の陶磁器は元を境にしてその相貌を一変している。宋以前の陶磁器は殆んどすべて青磁・白磁・天目といったどれも単一な釉薬・器形・文様のものであるが、明以降は染付・赤絵・辰砂・交趾のような複雑多岐的なものがその主潮をなし、清朝には繁褥猥濁な猶々悪どいものになっている。

青磁は中国陶磁史の核心をなすものであり、深く漢文化に根ざすものである。その発生も一番に古く、中国陶磁器の最も栄えた唐宋両朝を通じて最も重要な窯、例えば唐の越州窯、北宋の汝窯、南宋の官窯、龍泉窯等すべて青磁の窯である。元以降見るべき青磁のないのは中国陶器の堕落を物語るものであって、その原因は蒙古族によって中国全土が征服され、漢文化が萎微衰退したためであろう。

中国の青磁史には二つの基幹的な中心がある。一つは漢・六朝から北宋にかけての越州窯であり、一つは南宋から元・明にかけての龍泉窯である。ひとり中国ばかりでなく、広く東洋全般の青磁はすべて上代は越州の影響を受け、中世以降は龍泉の影響下に起っているが、越州も龍泉もともに浙江省内にあり、浙江は漢以来終始中国の青磁の中心地であった。

古来我国では中国の青磁を砧・天龍寺・七官の三手に分け、砧を青磁の随一としているが、砧は中国の青磁の最も発達した南宋時代、最も盛んに青磁を焼いた龍泉窯のものである。今日我々が更にひろい観点からながめても、やはり南宋の龍泉、即ち砧が歴代中国の青磁を代表するものであって、古人の眼識の正しさに今更に敬意を払う次第である。(昭和18年刊)

カット左から
青磁四耳壺　越州窯　唐時代
青磁多嘴壺　越州窯　北宋時代
青磁雕花瓶　耀州窯　北宋時代
青磁鯱耳瓶　龍泉窯　南宋時代
青磁貼花壺　龍泉窯　元時代



季刊 美のたより No.47
昭和54年 6月 20日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.